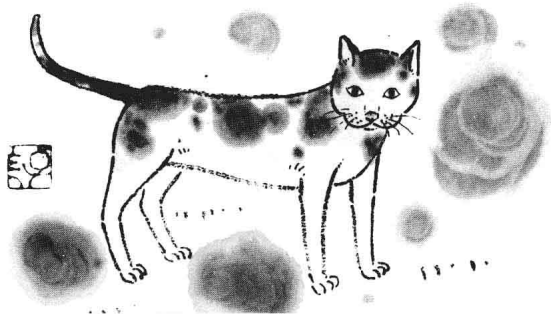


夫婦攻防譚

土岐雄三



潮出版社

夫婦^{めおと}攻防譚

初版印刷 一九七一年十二月十日

初版発行 一九七一年十二月二十日

定価 四二〇円

著者 土岐雄三

発行者 池田克哉

発行所 株式会社 潮出版社

東京都新宿区南元町十四ー一

電話 三五七ー七二二(代)

振替 東京六一〇九〇

印刷・製本 大文堂印刷

©Yuzo Toki printed in Japan 1971

土岐雄三(とき・ゆうぞう)

一九〇七年六月、東京に生まれる。青山学院商科卒。長年銀行に勤務し、活躍するかたわら作品を発表していたが、現在執筆に専念。『カミさんと私』など多数の作品がある。最近『わが山本周五郎』を出版し、好評を博す。ペンクラブ、放送作家協会員。作家。

落丁・乱丁本はお取り替えます

夫婦攻防譚

目次

亭主の旗あげ

7

攻撃もむなし

23

将校は、やはり妻

35

なせば成る

50

ひそかなる支援

63

それを求めるとき

82

攻防ともに喘ぐ

91

兵糧攻め作戦

103

コタツの脚

117

狼狽する亭主勢

129

一生一代の決意

150

意外な戦果

169

女房は稼ぐ

179

母になる代償

191

新たな戦術

204

戦い終わる

218

装幀・挿絵 秋野卓美

亭主の旗あげ

都市は西南部に発展するといわれる。東京を中心とするいわゆる首都圏も例外ではない。小田急、東横沿線、あるいは中央線の吉祥寺、三鷹方面がまずひらけ、東北部に当たる埼玉県はとり残された感じだったが、急激にふくれあがった東京都の人口は、やがてここにも押し寄せてきた。県南部の川口、浦和、大宮も、おくれげながら東京のベッドタウンとして、ここ数年にわかに人口が急増し、大きな団地がつぎつぎと建てられた。

ここもや鵠ヶ丘団地は東京都の北、埼玉県の西南部にある。むかし桜草で有名だった田島ヶ原の一部で川ひとつ向こうは東京都。新大宮バイパスという自動車道路ができてから、急速に開けた新興の宅地だ。

ここに数年前、田圃を埋めたとて、住宅ができた。

通称、南浦和団地とよばれる大聚落は、住宅公団の手になる大団地だが、わが鵠ヶ丘は、その端っこにある。

鵜ヶ丘などと洒落た名前をつけられているが、そんな地番はない。

一部残っている雑木林に、鵜や尾長があつまるところから、地主が勝手につけた地名であろう。

農地を売った、にわか成金の地主が造った私設アパートだが、公団住宅に入りそこねた二十数世帯が、いまここに住んでいる。四階建て二棟。各階二世帯で、一フロア2DKの部屋が、左右に隣り合っている。設計は、公団のそれと大差なかった。

ただし私営だけに、部屋代は二、三割方高いが、みてくれだけは若干よろしい。建物の外装を淡いピンクに塗ってあるのが、ここの住人になにがしかの優越感を与えているようだった。芦本浅吉一家と、稲垣猛二とその妻真理子は、去年の暮れからここに入居している。あるじの稲垣は、川口市の鋳物工場に通っていた。

猛二などという、タケダケしい名前のおとなしい男で、その分だけ、細君の真理子が埋め合わせのつもりか、でしゃばりの金棒引き。

入居早々、隣家（正しくは隣室というべきだろうが）の芦本浅吉の細君たか子と、かなり派手な一戦を交えた。

きっかけは、稲垣一家が引っ越してきた当座、なんの挨拶もなかったということであるが、ありようは、真理子がたか子より若く、かなり美貌の持ち主なので、これが、たか子の自尊心

を傷つけたことにあるようである。

「バカにしてるじゃない」と、たか子は憤慨して亭主に言った。

「隣りに越してきたからには、それ相当の挨拶ってものがあるはずじゃないの。それなのに、私と顔を合わせても、ウンでもスウでもないのよ。ひとをなんだと思ってるンでしようね」

「そうかね。旦那のほうは、ばくによろしくって言ったがなア」

「ご主人はいい人らしいわ。真面目でおとなしそうで、好感もてるンだけど、あの奥さんは曲者よ。いやにツンケンして、感じがわるいッたらありゃしない」

「まア、そう決めつけるもんじゃないよ。人は見かけによらないって言うから……」

「あなたは駄目よ、きれいな人には弱いンだから……」

しかし、あの美貌はつくられたもの、つまり、いまはやりの整形によるもので、コトによるとバーのホステスかなンかじゃないかと思う。教養もないらしいし、世間づきあいも知らないように思う。結局のところ、気のいい亭主がいいようにされている、というのがたか子の所感であった。

「それになによ。きのう偶然見ちゃったンだけど、朝、ご主人が出かけるとき、扉を開けっ放しのまま抱き合ってるのよ。キスかなんかしちゃって……いやらしいじゃないの」

たか子の表現はちとオーバーである。稲垣猛二が出勤の折り、戸口で見送る細君に頬をよせ、

額のへんに軽く接吻をうけることは時折りあるが、抱き合つたという言い方は当たらない。

「いいじゃないか、ひとはひと。他人のわれわれがとやかく言う筋じゃない」

「そうかもしれないけど、あんなこと人前でするなんて、お里が知れるわね」

たか子は、夫が稲垣夫婦に同情的であるのも氣に入らなかった。彼らの住む団地から、南浦和駅まで歩いて約三十分、バスだと十分少々で行ける。

そして、そのバスの最後は夜の十時半。

バスがなくなると、歩くか駅前タクシーに乗らなければならない。

夜おそい電車が駅につくと、止まるのを待ちかねて、人々はいっせいに階段をかけ降り、改札口を走りぬけて、タクシー乗り場に行列をつくる。

暮れのボーナス景気が正月まで尾をひいたのか、タクシー利用者の行列はいつも長い。

ときには、二十分あまりも寒風に吹きさらされ、待つこともあった。

「ああ、芦本さん……」

その夜、芦本浅吉も新年会でおそくなった。歩いて帰ればタダですむが、疲れてもいたし、多少待たされてもタクシーのほうが早く帰れる。

声をかけたのは、数人先に並んでいた稲垣猛二であった。

「いまお帰りですか？」

稲垣が言った。

「ええ、ちょっと会がありました……」

二人は、間にはさまった人の頭越しに挨拶を交した。

「ご一緒しましょうよ」

稲垣はうしろの人たちに断わりを言って、芦本を自分の前に誘った。

「稲垣さんもこんな時間に……」

「めったにこんなことはありませんがね」

言いながらタバコをくわえ、ライターを鳴らして、

「これからはやるつもりですよ」

そういう稲垣は酒の匂いがした。

「断然やるつもりです」

「やるやるって、なにをなさるんです？」

「夫権復活ですよ。女房から主権を奪回しようという同盟ができてね、今日はその同盟発会式というわけで……」

稲垣は笑った。カラカラという形容が許されるとすれば、彼の笑いはその手のものだ。

「なるほど、夫権復活ですか？」芦本が訊くと、

「失地回復といってもいいでしょう。沖繩は返ったが、われわれ亭主どもの戦後はまだ終わっていませんからね」

話している間に自動車が来て、行列はすこしずつ前に動く。

三、四台続いてくるかと思うと、またバタツと間遠うになる。

寒月という言葉どおりの月が、冴々^{さえず}と中天にかかっていて、澄んだ冬空に星が瞬^{またた}いていた。

行列の人々は、外套の襟を立てたりマフラーで顔をくるんだり、なかには足踏みをして、泌み入るような寒さに耐えている人などがあつた。

「それはおたくの会社内でのことですか？」

芦本も、冷たい風に酔いがさめたらしく、首をすくめ、小きさみに身体をゆすりながら尋ねた。

「そう、発起人は社外の男ですが、そいつの友人がうちの工場にいましてね。差し当たり彼が元締めというか、教祖というか……」

「で、具体的にはどういう方法で？」

「まず、月給袋は絶対に女房に渡さない……」

芦本は、ふんふんと頷き、氣をのり出さずにはいられなかった。

「その教祖の男のいわくですね。内閣閣僚のなかで、いちばん強いのは大蔵大臣ではないかっ

て……」

「そりゃそうでしょうとも。なんせ、大蔵大臣は財布の紐を握っていますからな、こりゃ絶対ですよ」

「われわれ私生活においても同じ、と彼は言うんです。一家の大黒柱であるわれわれ亭主が、まるで子供同様に女房から小遣い銭をもらう。いや、子供のほうが亭主よりもっと金をつかっているそうですよ……」

職場の蹶起大会けっきじみたその夜の酒宴で、主唱者某は大声をはりあげて叫んだという。

「つまりだな、小学生二人いる家庭のおやつ代が、平均月四、五千元はかかるというんだ。これをどう思う諸君！」

叫ぶご当人の「主人小遣い」なるものは、おそらくその程度か、あるいはそれ以下であろう。彼は自分の演説に酔い、（相当アルコールが廻っていたせいもあったろうが）声涙ともに下るといった調子で、

「いいか諸君……」

と続けた。

「そもそも『小遣い』なる日本語を字引きでひくと、『子供や雇人に与えるハシタ銭』とあるそうじゃないか。ええ、おい諸君、われわれ亭主は絶対に子供や雇人じゃないんだぜ。そうは

思わないか、え、どうだ」

稲垣猛二は、その場の雰囲気を芦本浅吉に語った。

満場、といっても十数人だったが、いっせいに拍手をし、床を踏み鳴らし、エイエイオウと拳固^{げんこ}を振りあげたということである。

「いいですね、ほんとにおっしゃるとおりです」

芦本浅吉にはまだ子供がいない。が、細君が妊娠し、遠からず父親になるであろうことは間違いない。

子供好きの彼は、結婚すればすぐにもわが子が得られるものと思いこんでいた。

しかし、子を産むのは母親である女の役だ。

その女が、かたくなに、拒み続けてきたのである。

理由はなにか？

子供ができると、自由が奪われるからだという。

ということとは、好き勝手に出歩けないということではしかない。

なにが自由だ、と芦本は肚^{はら}をたてた。

亭主を勤め先に送り出したあと、世の女房どもは、姑、小姑に気がねするでもなく、なんの拘束もうけはしない。